

第十二回 武蔵野文学賞「高校生部門」

俳句部門 選評

● 選考委員

武蔵野大学客員教授 井上 弘美

武蔵野大学教授 三浦 一朗

武蔵野大学教授 堀切 克洋

● 選評

一句単独の部

【佳作】

暮合に馥郁たるや木犀花 朝日 七星

日暮れという特別な時間を設定して、「暮合」という言葉を使ったのが印象的。「木犀」の花は中秋のころに芳

香を漂わせるので多くの人に親しまれているが、夕闇に周囲の風景が沈んでいく時間には、とりわけ香りが強く感じられる。それを「暮合に馥郁たるや」と表現して歯切れが良く、漢詩的な味わい。季語は「金木犀」、「銀木犀」どちらも置けただろうが、「花」の一字によって一句が華やかにまとまった。動詞を用いることなく、木星の香りを浮かび上がらせて鮮やかでした。（井上）

ギョツと手を握る姉との夏まつり

石塚 瑞貴

「ギョツと」姉の手を握っているのは、妹である作者だと理解して鑑賞した。子どもの頃の記憶かもしれないが、「姉」と二人で「夏まつり」という、未知の刺激的な世界へ繰り出す期待や不安がよくわかる。この句が「夏まつり」から始まらず、「ギョツと手を」という意表を突く表現で始まっていることも、句の内容を生かしている。「夏まつり」の開放感の中で、姉の手を強く握っていた感覚が鮮明な一句。焦点の絞り方にセンスの良さを感じました。（井上）

餌のない釣り糸垂らす夏休み

河田 徹平

餌のない釣り糸を垂らしたと言えば周の太公望呂尚の故事が想起される。もっとも、この句の〈私〉は仕えるべき主君の訪れを待ったわけでは当然ないだろう。この句では、魚が釣れるはずのない釣り糸を垂らすことが、

特に目的なく、のんびりと無為に時間を過ごすことの比喩として受け取られる。「夏休み」という設定と相まって、退屈とは異なる、ゆったりと穏やかに流れる無為な時間の快さが表現されているのがよい。(三浦)

蓮池や水面に映る雲の峰

福田 光琉

夏の蓮池であれば、水面の多くは葉に覆われて隙間は少ないであろう。そのわずかに覗く水面に、空にもくもくと湧き上がる入道雲が映る。池一面の蓮の葉の緑と、その隙間の水面に映る「雲の峰」の白さのコントラストが美しい、絵画的な句である。(三浦)

英会話教室のインコ日永し

福田 理紗

「日永」は、夏の「短夜」、秋の「夜長」、冬の「短日」と四対になる季語で、文字通り日が長くなってきた時期、とくにあたたかな夕方を思わせる。インコは「しゃべる鳥」なので、もちろんすべての英会話教室にいるわけではないが、実景だとすれば滑稽味のある現実を切り取った一句。インコもまた「日永」を言い合っているように、のんびりとした気分になる。(堀切)

叢に忘れし白球と夏と

舟橋 知美

「草叢」に紛れ込む「白球」という題材は珍しくないが、まるで落とし物のように「白球」と「夏」が忘れられているという発想は柔軟。この句の「忘れし」の主体が作者自身なのか、誰かが「忘れし」「白球」を作者が見つけたのがやや曖昧だが、読者は「草叢」に「忘れ」られた「白球」をイメージできる。この句は「白球」と「夏と」を組み合わせた点に工夫があるのだが、ここが俳句の難しいところで、評価の分かれる点でもある。対象をリアルに詠み切る方が、俳句としては強いからだ。この点を指摘した上で、置き去りの「白球」と「夏」という青春詠のもつ眩しさを大切にしたいと思いました。（井上）

灼くるスタンド吸い込まれる白球

村松 奏哉

俳句は五七五という形式をもっているが、「五／七／五」とわかりやすく切れるわけではない。この句は〈灼くるスタンド／吸い込まれる白球〉と二連の詩が一行に収まっている疾走感が感じられ、それが「吸い込まれる白球」というボールの落下のスピード感と重なり合っていて印象的な一句。（堀切）

夏畑「我、隊長ぞ」と旗を振る

山口 陽菜乃

「我、隊長ぞ」と言って旗を振るのは、探検隊のごっこ遊びをするリーダー役の子供だと考えられる。夏畑

は、子供の背丈ほどもあって迷路のようなトウキビ畑か、ヒマワリ畑か。今の高校生にとっては必ずしも実体験ではないだろうが、何らかの映像などで追体験した「懐かしい子供時代の原風景」を描いて、フィクションとしてのノスタルジーを感じさせる点で面白い句である。

なお、審査の時にこの句について、戦争を生き延びた帰還兵が精神に異常をきたして、終戦の時期に重なる夏に「我、隊長ぞ」と旗を振る狂気を描いているのであればすごいのだが、という意見も出た。ただし、読者に確実にそういう句だと読ませるには、表現にまだ説得力が足りないということ最终以選考委員の意見が一致し、はじめに書いた理解に基づいて佳作とするに止めた。(三浦)

複数句の部

【優秀賞】

背骨のやうな

清水 航

〈手は海の色に染まらず雛流し〉〈水槽の砂利の偏り台風来〉〈都鳥一朵の雲も寄せつけず〉の三句が特に優れていた。海に流す「雛」を見送る悲しさを、自分自身の手は「海の色」に染まることもないと表現する感性や、「水槽の砂利の偏り」を、まるで「台風」が来ることと関係があるように取り合わせる表現の妙、さらには、「都鳥」の白さを「一朵の雲」も寄せ付けない白さであると一物で捉えきる手腕など、申し分のない三句で、今後の可能性を感じた。

惜しかったのは〈木刀の大鋸屑払ふ夜涼かな〉で「大鋸屑払ふ」は「おおのこくずはらう」と読むと九音あるので、「鋸屑払ふ」と七音にすると季語も効果的で良い。生きものを詠んだ作品が何句かある中で、「がうな」や「鳩」はよく特徴を捉えているが、〈電柱を蚯蚓の墓と思ひけり〉はなぜそう思うのかがよくわからなかった。それに対して、冒頭の「山笑ふ」は「起工式」にユーモアがあって楽しく、「向き変へて」「手拭い」なども何でも

ない題材の描き方、捉え方が新鮮で、季語の置き方にも工夫がある思った。全体に伸びやかで瑞々しい作品だったが、最後の四句が弱く、まとめきれなかったことが残念だった。複数句の場合、必ずしも春夏秋冬と季節を揃える必要はないので、始めと終わりをよく考えて余韻を残すことを考えて欲しい。完成度の高い作品があるのに、最後のまとめが弱いと印象が薄れてしまうので、この点をぜひ解消して再挑戦して頂きたい思いました。

（井上）

日常的な身の回りの情景の中で何かしら目がとまったもの、特にその細部に着目してうまく切り取って句にすることと、ものごとの把握にユーモアが感じられることに特徴がある。「爽やかや」句は、鳩にも「二つ鼻の穴」があるという微視的な気づきを「爽やか」さと取り合わせて、独特なおかしみを生んでいる。「水槽の」句も、台風の訪れを「水槽の砂利の偏り」という生活の中にあるものの細部に着目して捉えているのが面白い。冒頭句〈山笑ふけふ犬小屋の起工式〉は、春の訪れを喜ぶ気持ちと、飼犬の小屋をこれから作ろうとする〈私〉の意欲や弾む気持ちの取り合わせが朗らかで楽しく、ユーモラスな味わいを持つ。一方で、厄払いのために流す雛人形との別れを詠んだ〈手は海の色に染まらず雛流し〉や、都鳥の羽根の白さが一層際立つ〈都鳥一朵の雲も寄せつけず〉など、必ずしも日常的ではない情景を印象的に切り取って他と趣の異なる句があるのもよい。

ただ、標題句〈唐黍を切つて背骨のやうな芯〉や「独楽回す」句など、恐らく実景を詠んだのだろうが、五七

五で表現されたこと以上でも以下でもないそのままの句で、句に広がりや味わいが感じられない。これは、日常的なものを切り取って句にするという句作りの特徴の、よくない現れ方であろう。身の回りのものごとに着目して句にするときに、その視点、その構図で切り取ることにどのような意味や効果があるのかをもっと意識するとよい。そうした意識の行き届いた句をより多く揃えることができれば、最優秀賞も狙えるようになるだろう。(三浦)

さまざまな先人の句を読み、かつ自身の生活の周囲に等身大のテーマを探して作品にまとめあげている作品として評価した。全体で最も目を引いたのは、〈爽やかや鳩にも二つ鼻の穴〉。誰もが見落としている小さなものに目を向けられる感性があり、鳩もまた呼吸をしているのだという決して当たり前の認識ではない気づきが、「爽やか」という秋の涼しさをアップデイトしている。〈水槽の砂利の偏り台風来〉。もちろん、台風の影響ではないのだが、水の入れ替えや魚の動きで、砂利は均一ではない。部屋のなかのわずかな砂利の変化が、地球規模の気の変化と出会い、呼応しているところに独自の目がある。〈電柱を蚯蚓の墓と思ひけり〉も、たまたま電柱の横に蚯蚓が果っていたのを目撃したのかもしれないが、蚯蚓と電柱の色合い、あるいは形にどこことなく類似性が感じられ、「思ひけり」という強い主観がしっかりと読み手にまで届く内容となっている。

一方で、比喻や見立てに疑問が残った句もあった。たとえば〈唐黍を切つて背骨のやうな芯〉は、トウモロコ

シを包丁で切ったときの認識として不思議な感覚に陥るのだが、冷静に考えてみると、「芯」はまさしく背骨に当たるものなのではないかと思えてしまう。タイトルを採った句であるだけに惜しい。へ縄跳びといふ羽に身を委ねつつも「羽」と「委ねる」という言葉の選び方があまり練られていないように感じられた。へ文旦や零れさうなるチワワの目も、「文旦」という季語が生きているのかどうか。先に十二音のフレーズができあがってしまうと、俳句に魂が抜けてしまうような印象を与えてしまうように思う。言葉を定型にはめていく喜びの先に、自分だけの表現を探すストイックさをもつことをこの作者には望みたい。（堀切）

【優秀賞】

泳ぐ

千田 大和

全体を統括する強いテーマや意識がある訳ではなく、取り立てて何事かが起こるわけでもなが、穏やかな日常を、丹念に写生することで掬い取り、春から夏へと推移する季節の流れに乗せて、一つの作品にまとめた点に力量を感じる。

作品として印象的だったのは〈炒めつつ割くえりんぎや春の朝〉の、「炒めつつ割く」の描写による、フライパンの中が見えそうな明るい春の朝のキッチンや、〈鳥雲に今日はチャイムの鳴らない日〉の、休日をおぼせる長閑な一日の描き方。この句は「チャイム」などとは無関係に、旅立つ日を心得て北へ帰ってゆく渡り鳥との取り合わせによって、時間という取り決めに従わざるを人間の生活が思われる。また〈永き日や坊主のわけをまた聞かれ〉には、「坊主」頭になった作者に投げかけられる様々な言葉が思われて「永き日」という季語の斡旋にもユーモアが感じられる。〈薔薇園や地図見る吾を抜かす人〉には独特の感性が感じられる。この作品は「吾」を追い抜く人、と作者の距離感が絶妙で、「抜かす人」の存在に意味はないけれど、これを捉えることで、咲き誇る「薔薇園」の花の中で、埋もれるようにゆっくり地図を見ている作者が見えてくる。表題句になった〈反抗期つひに来ることなく泳ぐ〉は、作者像をよく捉えている。感情の起伏が穏やかなのか、内側に抱え込んでしまっているのか、ともかく「反抗期」を経験したまま、裸の己を水に委ねているのである。「薔薇園」同様、人ごみのように自己を客観視しているのが独特で、強い自己主張が無いことが魅力とも思える。

最後に、二十句という作品を魅力的なものにするためには、読み手を圧倒するような存在感のある一句や、作品としての盛り上がり欲しい。そういう意味で、最終部分が弱かったのが残念だった。(井上)

決して人口の密集した都会ではない、「網戸に蝙蝠」がとまっているような〈腹丸き蝙蝠がゐる網戸かな〉と

いう句がある）、地方都市のさらに郊外といった自然豊かな地の理をうまく生かした作品。田圃や月にも関心を向けながら、〈永き日や坊主のわけをまた聞かれ〉〈反抗期つひに来ることなく泳ぐ〉のように、日常をゆるく楽しく、自嘲をもって描き出し、それを自然詠のなかにさりげなく混ぜ込んだことも成功している。後者は藤田湘子の有名な句〈愛されずして沖遠く泳ぐなり〉も少し頭を（いい意味で）よぎる。

〈雁月のごま濃きところ春の雨〉は、「がんづき」と読み、宮城全域で食べられる郷土菓子であるらしい。丸い形を月に、乗せられたゴマを満月に向かって飛ぶ雁に見立てたネーミングであるようだが、それを知ると「ごま」がふたたび「雁」に見えてくるような味わいもある。どこことなく景色を貫くのは、侘しさのような感覚で、二句目の〈炒めつつ割くエリンギや春の朝〉や、後半で出現する〈ガチャガチャの値下げされをり夏休〉は、通俗的であるが、これを「寂しさ」と感じられるのは才能であると思う。むしろ、自然詠は自然を切り取ってくるという意思が働くだけに、逆に「寂しい」景が選択されているようにも感じられる。〈犬ふぐり水路に落ちて流れざる〉〈蛇穴を出づバス停に椅子一つ〉〈夏近し雲を遠くに昼の月〉。このあたりの句のバランスが取れてくると、作品全体としても強度を増していくのだろうと思う。（堀切）

【佳作】

花は葉に

戒能 李咲

標題句「花は葉に」は、花が散って葉桜になる季節の移ろいと、受験生であろう〈私〉の単語帳にしたいに付箋が増えていくという二つの時間の流れを重ねて描いて、味わいがある。この句の他、慣れないリングの皮むきの失敗をユーモラスに捉えた「林檎むく」句や、家族との何気ない会話の場面を描いた「湯豆腐や」句など、全体として散文的な感覚で物語の一場面のようにものごとを捉えた句作りが多い点に特徴がある。〈一様に揺れとも各々がコスモス〉は、まずは秋の野の情景の中での気づきを詠んだものだろうが、どの時代でも、若者が若者としてひとくくりにされがちなことへの反発も読み取れようか。

ただ、「焼芋を」句で仲直りのために焼き芋を割って相手に半分差し出すところや、冒頭句「姿見の」でお気に入りのコートを着た〈私〉が鏡の前で「二度回る」ところなど、物語としてよい場面にしようとする余り、少しわざとらしく、狙い過ぎの感が否めない。難しいところだが、そのバランスは考えた方がよい。また、身の回りのものごとを題材にした散文的な感覚での句作りはそれでよいが、また異なる方法や題材での句作りも意識して取り入れるようにすると、連作としてバラエティのあるよりよい作品になるだろう。（三浦）

表題句、〈花は葉に付箋の増えた単語帳〉ほか〈夏服や背にイタリアの港街〉〈制服の藍色深き初秋かな〉などの作品に注目した。桜が葉桜になっていく季節の推移と、「単語帳」に「付箋」がたくさん付いて勉強量が増えていく様子、

「夏服」の背に描かれた「イタリアの港街」は旅に出たくなるような夏の開放感そのもの、また、初秋を迎えた「制服の藍色」には、爽やかな季節を迎えた清々しさが捉えられていて、それぞれよく詠めている。ただし、「夕立に」や「子らの代わる代わる」は音読した時のリズムが良くないのが惜しい。日常の題材を詠んでいるのは無理が無くて良いが、〈一様に揺れても各々がコスモス〉はありがちな捉え方。〈白露や父の涙を隠しけり〉も「露」と「涙」が近すぎて俳句としては印象に残らない。〈焼芋を割りて謝罪の言葉とす〉は、「謝罪の言葉」がストレートすぎるので、一工夫欲しい。〈節分や鬼の見慣れた背に向けて〉は、見慣れた背中に豆を打つという意味だと思うが、「鬼の見慣れた背」と表現しているのでわかりにくい。「湯豆腐」の句はいいと思うので、最後を丁寧にとめると良くなると思いました。（井上）

【佳作】

石の色

西野 奏子

〈保管庫の鍵渡されし青葉闇〉〈電車にも街の匂いや今朝の秋〉〈手のひらで満たせり革手袋の赤〉など、感覚の冴えた作品だと思った。「保管庫の鍵」に対しての「青葉闇」は、何を保管しているのかはともかく、保管庫そのものの闇をイメージさせる。また、立秋を迎えた日の朝の「電車」に「街の匂い」を感じるのは独特の感性。さらに、「革手袋」に手のひらを入れる時の隙間の無い感触を、「手のひらで満た（す）」と描写する表現力は秀逸。表題句「石の色までなつかしく」という表現も季語によってしみじみ伝わる。全体に色彩感のある作品がちりばめてあるのも良いと思ったが、十三句での構成なら季節はせいぜい二季。四季あるとばらばらなイメージになってしまう。〈サルビアや倉庫にのこぎりつるされて〉は五、八、五のリズムで中八になっているのが惜しい。例えば〈サルビアや鋸吊るしたる倉庫〉と解決する方法もある。「屋台片付いて」や「石の色まで」「新品の時計」などは句跨たがりのリズムを生かしているが、多用するとその効果が生きない。また、基本的な、俳句表現は受け身は避ける方が句が明瞭になる。力があるのでもう少し句の数を増やして見せて欲しいと思った。（井上）

【複数の部 講評】

武蔵野文学賞の高校生部門に「俳句部門」が創設されて、四年目を迎えた。今年は八編の応募で、複数部門が定着しつつあることを嬉しく思う。まずは、応募して下さった皆さんの努力を称えたい。複数部門は数には規定は無いが、多くの作品が季節を跨いでいるので、歳時記を丹念に読んでの応募だったと思う。複数部門に応募することで、四季を通して歳時記を開き、多くの季語と出合って頂ければと期待している。(井上)

今回最優秀賞は出なかったが、力作を寄せてくれた皆さんに感謝したい。それぞれに個性を感じさせる詠みぶりで読むのが楽しかったが、連作として見るときに、十句なり二十句なりに何らかのテーマ性や一貫性があるのもっとよくなるだろうと思う作品が少なくなかった。一方で、句を詠む手法の面では、一つの連作の中でもっとバリエーション豊かに句を詠もうとする意識があってもいいと思った。季語の豊かさと先人の句に学んで、様々な題材を、様々な切り口と方法で詠み分けた先に、一貫した何かを読者が感じ取れるように句を選び抜く。もちろん難しいことだが、連作で句を作る一番の面白みでもあると思う。是非隅々にまで意識の行き届いた作品作りに挑戦してもらいたい。(三浦)

受賞には至らなかったが、関根杏華さんの作品「槐の月」二十句にも注目した。幻想的な作風が持ち味で、

へぽつかりと扉消えたる休暇明けへ（卵巢の夢見るさかな蜜柑むく）なども楽しく読んだ。ただし全体に選ばれる言葉が互いに独立しすぎていて、全体で詠みたいテーマが伝わってこなかった点が惜しまれる。一句では面白い句が作れても、複数句となると、作者の私性がおのずから浮き出てくる。だからこそ、そこに何らかの一貫性がほしいという思いもある。俳句の中に「私」が直接的に描かれることは常ではないが、選び取った景色や言葉の集積が、いまの「私」を映し出すということを自覚したうえで作品を構成する。その点にこそ、複数句に時間と頭脳と身体を費やす価値があるのだと思う。（堀切）